

2011年 秋のご挨拶



(東北大にて、植松教授と。2011/9/29)

[箱モノのありがたさ]

水煙会会長 長崎 駿二郎

日本の自然が一段と美しく映える錦秋の候となりました。半年強前、その自然の猛威に曝され多くの犠牲者を出し、2次災害の原発事故も加わって数十万人の方々が避難を余儀なくさせられました。過日、東北の被災地へ行き、未だ避難所生活をせざるを得ない状況を垣間見るにつけ、「何とかならないものか」「何かしてあげられないか」と思うと共に、全く住居には適さない体育館でも、余震や暑さ・寒さ、雨露しのぐ「箱モノ」が有って良かったな！とつくづく感じました。津波で街ごと没われて、何も残っていない広大な野原をみると余計その感が強くなります。

又、その折自分たちの学舎を失ってしまった、東北大学院工学研究科都市・建築学専攻も訪ね、専攻長であられる植松康教授とお会いしてきました。こちらから支援を申し出て、その窓口を開いて戴いた「御礼」と事務的な体制が整わなかった為に遅くなってしまった「お詫び」を申しあげました処、「同じ国立大で同じ建築を志す者同士とは言え、他の大学の卒業生の皆様からご支援戴けるとは思ってもみませんでした。でもお陰さまで自分たちの大学の卒業生にも声が掛けられ、水煙会の皆様に改めて感謝を申し上げます」と御礼の言葉を頂戴して参りました。

そしてご存じの通り、母校・横浜国立大学理工学部建築都市環境系学科の大原一興主任教授が、日本建築学会論文賞を受賞されました。[脱施設化の流れに於ける現代の施設計画に関する一連の研究]と言う50編近い論文の積み重ねを高く評価されての事だそうです。確かに日本が高齢化に伴う成熟社会の中では、それまでの計画論では捕捉しえない部分や適合しない機能などが出て来ってしまう事でしょう。ただ津波や放射能で街ごと建物ごと無くなったり、使用不可能な状態、まさに原始的な状況に陥ってしまうとまずは施設ありきで、附帯の機能等があまり合っていないとも取り敢えず「箱モノ」があって良かったという事が言えそうです。

昨今は[箱モノ行政]とか言われ、税金の無駄遣いの代名詞みたいに使われますが、今こそ「箱モノのありがたさ」を改めて感じざるを得ません。そこで、自分たちの足元「水煙会」と言う「箱」を見てみると、大学の法人化に伴い同窓会機能の強化が進行しており、特に全学統一した同窓会を整備する方向が検討されています。この動向には、当然当会も積極的に協力して行く方針としていますが、逆に工学部は八つの同窓会が分離独立しており「何とかならないのか？」とも言われています。

この大きな流れに「今の状況の水煙会」と言う「箱」が飲み込まれてしまっても、それ程大した問題にもならないでしょうが、一度この様な事で吸収合併されると、他事例からも判る通り「人・もの・金」が散逸してしまい、再構築する事はほとんど不可能と言えます。

関東大震災や戦後の焼け野原から、横浜あるいは日本の復興を担った多くの人材を輩出してきた母校、特にそのシンボルである「建築」を創る仕事に携わった方々の集まりで、40年も続いてきた「水煙会」と言う同窓会をやはり大切にすべきと考えております。「やっぱり水煙会と言う[箱]は必要だよ！」と皆様から言って戴けるよう引き続き努力して行く所存です。どうぞ宜しくお願い致します。